

**目的** 夏になると省エネルギーやノーネクタイが提唱され、生理的な面での不合理さがたびたび指摘されているにもかかわらず、サラリーマンの背広服にネクタイという着装スタイルは、依然として支持されなかに制服化しているといえる。ドブネズミ룩フセいう言葉に代表される没個性化や無頓着さには、服装に対する男性特有の規範意識が強く反映しているのではないかと考え、その意識の構造を明らかにするために調査を行った。

**方法** 理論仮説にもとづく分析モデルをもとに調査票を作成し、高蔵寺ニュータウンに居住するサラリーマン600名を対象に、1981年8月13日～9月3日の期間に配票留置法によるアンケート調査を行った。得られたデータをもとに単純・クロス集計および因子分析を行った。規範意識を構成する主要な因子を抽出した。

**結果** 因子分析により得られた主要な因子は、①因子、職場での服装は信守しようために地味な背広を着てネクタイをきちんとしている方がよい、お金をかけていいものを揃えた方がよいといった威信性重視因子、②因子、職場では周囲の人と同じような服装をするのが好ましいといった連帯性重視因子、③因子、男性は男らしく、女性は女らしい服装をするのがよい、中高生の制服は学生らしくさせるためにあつた方がよいといった標識性重視因子、④因子、他人に不快感を与えない服装をするべきだ、場所極にふさわしい服装をするべきだといった容儀性重視因子、⑤因子、背広・ネクタイ姿は品位や落着きを表わしているといった背広・ネクタイ愛好因子、⑥因子、職場での背広・ネクタイスタイルは無難でいいといった慣習同調因子の6因子(説明率95.1%)である。